2 Sa－10

子どもの「手の働き」に関する研究（第７報）
子どもの手の働きと学校教育

福山市立女短大　加納三千子 山本百合子 金田すみれ 西川龍也 ○正保正恵

【目的】　本報では，手指の巧緻性や左右の手の共働性に働きかけるような教育内容を，意図的に学校教育に盛り込んでいくことを考えたい。さらに家庭教育や地域の教育の実状をふまえて，今後の学校教育のあり方をも問い直したい。

【方法】　本研究の第１報から第６報までの研究結果をふまえて，学校教育の中に「手の働き」に関する教育内容を具体的に実現するために，何を考えなければならないかを提言する。

【結果】　学校教育は，子どもたちに対して日常の生活経験に加えて，社会を運営し社会全体の生産力を高めるための手段を教えるという目的をもって出発した。さらに手段だけではなく，多くのことを知ることで人類の知的資産を拡大していくという大きな目的も持っている。

ところが，第１報～第６報までで明らかにしてきたように家庭の教育力や地域の教育力が低下してきたために，日常の生活経験が希薄になっており，かつて学校教育で担わなくてもよかった部分に目を向けざるを得ない状況が露呈してきている。

学校教育がこういった問題をすべて担うべきかという議論は残るが，「手の働き」を意識的に学校教育に位置づけていこうとすれば，根本的には，先述の教育の目的自体から見直していかなければなるまい。また，次の改訂に向けて，「手の働き」に関する教育内容をリストアップし，給食指導や生活指導にも盛り込むことを提言したい。